小結

前漢期の五行説は、基本的には先秦期と同様に雑多で、異なる系統が並存していた。それぞれの分野で独自に事物を五行に配当し、また、五行の相互関係についても相勝であったり六合であったり沴であったりと、異なる説が運用された。

『漢書』巻三十 芸文志では数術略 五行類に於いて、『泰一陰陽』『四時五行経』『陰陽五行時令』『鍾律災異』『刑徳』『五音奇胲用兵』等々、三十一家六百五十二巻を著録している。これらは現存せず、本章で考察しなかったが、恐らく択日・時令・災異・納音といった事柄について、五行を用いて説いた文献であろうと推測される。これらについて、芸文志は次のように説く。

皆出於律歴之數、而分爲一者也。其法亦起五徳終始、推其極則無不至。而小數家因此以爲吉凶、而行於世、寖以相亂。

これらはいずれも律暦の数に由来し、それが分かれてそれぞれの派をなしたものである。また、これらの法は五徳終始にも由来し、五行を敷衍し尽くして、あらゆるものについて論じた。しかし、卑賤な占術家たちがそれに基づいて吉凶を判断するようになり、その術が世間に行なわれて、段々と本来の学術を乱して行ったのである。

劉歆の考え（『漢書』芸文志は劉歆『七略』に基づく）では、術数の学は本来「明堂羲和史卜之職」であり、つまり由来は一つであると見なす。それが分派し、「小数家」たちによって有象無象の雑説が展開されたという。

しかし、前章・本章で考察した通り、少なくとも現存する資料を見る限りは、むしろ雑然と発生した雑多な諸五行説が、そのまま各自で発展して来たと考えられる。そして、前漢中期頃から、そういった雑多な諸五行説の中のいくつかが、儒者たちによって用いられるようになったのである。

例えば、五徳終始説は戦国・秦代には方士たちによって唱えられていたのだが、文帝期に賈誼によって漢土徳説が提唱され、武帝期には兒寛や司馬遷といった学者による議論を経て、遂に改制を実現した。時令は様々な説が存在していたが、『呂氏春秋』十二紀・『明堂月令』の系統、すなわち月令が魏相・李尋等によって用いられ、成帝期には詔令にも使われている。『洪範五行伝』は『尚書』洪範に基づいて作成され、夏侯勝以降の尚書学者たちによって用いられた。

このような、儒家による五行説の吸収という背景の下で、前漢末に、劉向・劉歆によって五行説の改造が行なわれた(1)。これについては次章以降に論じる。

なお、董仲舒の作とされる『春秋繁露』にも五行について説いた篇がいくつかあるが、本章では取り上げなかった。何故なら、これらの篇は前漢期の成立とは考えにくいからである(2)。